

## 【テッドさんテーブルクロス外伝】ズォーダー大帝最後の勝利 【第三稿】

遠野秋彦

本作を佐藤大輔に捧げる。ただし、もしこれが佐藤大輔の目に触れたならば、著者は確実に殴られるであろう。

### ズォーダー大帝最後の勝利

イスカンダル戦役を終え、宇宙戦艦ヤマトが地球のドックに入ったとき、誰も宇宙戦艦ヤマトの修復は容易だと考えていた。イスカンダルを巡って、地球、ガミラス、イスカンダルの奇妙な連合は暗黒星団帝国と対決したが、その対決に対して地球そのものと太陽系は蚊帳の外で有り、地球の生産設備は無傷だったからだ。いくらワンオフのカスタムパーツが多い宇宙戦艦ヤマトとはいえ、生産設備がフル稼働していれば難しいことは無いはずであった。

ヤマトマニアと陰口を叩かれていた真田技師長の発案による準同型艦の波動実験艦ムサシ構想も追い風になるはずだった。

遅々として進んでいないと批難されていたが、波動実験艦ムサシのパーツもある程度転用できるはずであった。船体はともかく、ムサシに搭載予定のスーパーチャージャー付き波動エンジンや、新波動砲も完成の目処が立っていた。

そして、宇宙戦艦ヤマトの復帰への大きな期待もあった。

暗黒星団帝国という謎の勢力の存在が確認された上に、デスラーの生存も確認されたのだ。もちろん、今更デスラーが敵対するとは真剣に考えられていなかったが、デスラーと暗黒星団帝国が再び激突すれば地球も無縁ではいられないかもしれない。

ところが、実際にヤマトに乗り込んで内部を調査した技術者達は顔色を変えた。

波動砲の台座がずれており、もう1回発射すれば確実に宇宙戦艦ヤマト

は船体が碎けるはずだったのだ。

このような致命的な問題が見過ごされたのは、宇宙戦艦ヤマトの艦内組織の問題だった。波動砲は形式上戦闘班の管轄とされていた。しかし、戦闘班が実際に行っていたのは発射タイミングを判断して引き金を引くことだけであった。エネルギーの供給は機関室から直接行われており、実質的なメカニズムとして波動砲は機関部に依存していた。しかし、機関部は機関部で戦闘に直接関与する気は無く、波動砲に対して波動エネルギーを十分に送り込めればそれで十分という空気が強かった。一方で最も波動砲に詳しくあったのは工作班なのだが、修理の補修を一手に引き受ける工作班も順調に稼動している装備をチェックしてまわるようなゆとりは少なかった。ただ単に航行していてもデブリは衝突し、装甲板の交換はいつでも必要とされていたからだ。

つまり、どの部署も波動砲を完全に扱い切れてはいなかったのだ。

では、どのタイミングでこの狂いが生じたのか。

最初の狂いが生じたのは、宇宙戦艦ヤマトが白色彗星戦役に参戦したときだった。最終決戦で宇宙戦艦ヤマトは被弾して、ガニメデ基地で補修を受けた。この被弾で、小さな狂いが生じていたのだ。しかし、波動砲そのものが使用できない状況であり、通常航行をしている限り問題のないものだったので、この問題は後回しにされた。

この狂いは、白色彗星戦役後の宇宙戦艦ヤマトの修理で見過ごされた。その理由は、主要メンバーが入院していたことと、新規抜擢された新機関長山崎の不慣れにあった。本来山崎は、狂いの問題を承知しており、それを補修技士に伝える義務があった。しかし、狂いを知ったのは機関長ではない時であり、自分に伝達の義務があるとは考えなかった。

この狂いが致命的に問題を起こしたのは、イスカンダル戦役でプレアデスに対して波動砲を発射した後だ。発射までは良かった。狂いは致命的な水準ではなく、新米スタッフが多いヤマトは波動砲の照準に関して慎重であった。

だが、発射後に突入ボルトが後退したときに、船体のフレームを損傷さ

せてしまったのだ。

専用ドックを作り、そこでほとんど解体に等しい補修を行わねばフレーム交換は無理であった。

しかし、ヤマトは復活しなければならない。

正体不明の敵の存在は、人民に不安を与えたのだ。

しかも、この時点での地球は有人艦を大量に運用できるだけの人的なゆとりが無かったのだ。

象徴は維持されねばならない。

しかし、修理のために解体されるヤマトの姿を見せてはならなかった。

小惑星イカルスに、ヤマト専用のドックが建造され、そこで秘密裏にヤマトの大修理が始まった。これは元ヤマト乗組員にも秘匿されるほどの極秘プロジェクトであった。

そこで話が狂い始めた。

ほとんど解体して組み直すなら、抜本的に性能を改善したらどうかというのだ。具体的には、当時の地球最強艦であるアンドロメダ級に匹敵する性能を与えたらどうかというのだ。

具体的には、アンドロメダを超える次期主力戦艦ライオン級建造計画、通称ラ號計画のために試作されていた四連装砲塔を搭載してはどうかというのだ。この砲塔は、一基だけなら既にテスト用に存在し、結果も良好だった。あと2つ建造してヤマトに載せれば良いというのだ。これだけで、より強力な新型砲をより多く装備できる。

だが、そこで更に話が変わってくる。

ヤマトの修理が終わる頃にはアンドロメダの時代からライオン級の時代になっているはずだ。そうなれば、アンドロメダ級並みの性能では十分ではない。ライオン級に匹敵する戦闘力を与えてはどうかというのだ。

未来を知る我々の感覚で言えば、この発想はおかしい。ライオン級は実際には予算の都合上建造されずに終わったからだ。だが、この当時はライオン級9隻、アンドロメダ級9隻、更に各種空母9隻からなる九九九艦隊構想が真面目に討論されていた時代だ。

そこで考えられたヤマトの改造案は、これまで艦上部にあった装備を第3艦橋の前後に移設し、改めて艦上部には三連装の主砲を5基搭載するというものだ。実現すればまさに最強だった。新しい地球の守護神、ヤマト伝説も夢ではなかった。新宇宙戦艦ヤマトと呼ぶ者さえいた。

そこで、待ったをかける者達がいた。航空隊関係者だ。

白色彗星戦役では、空母と航空隊がバルゼーの空母部隊を奇襲して痛撃を与えた。その旗艦は宇宙戦艦ヤマトだったのだ。それに対して、砲戦部隊は常時彗星帝国の戦艦部隊に劣勢を強いられていた。そのような状況で、大型の戦艦などを作ってもあまり意味が無いというのだ。

彼らが提示する理想の宇宙戦艦ヤマトとは、波動砲以外の大形砲を全て撤去し、艦首から艦尾まで全て航空機取り扱いスペースとした機動部隊旗艦だった。

これはこれで魅力があった。

航空部隊の実力は誰もが認めるものであったが、地球艦隊の主力空母は戦艦と空母の合いの子のような煮え切らないデザインであり、どうせ敵に届かない主砲など取ってしまった方が良いと言う批判が常にあったからだ。機動部隊の旗艦にヤマトが徹するなら、大形砲など取った方が良い。

2つの案がにらみ合ったまま時間だけが過ぎ去った。

だが、地球の守護神が解体されたままイカルスのドックで寝ているのも良いことではなかった。

さすがに、上層部から妥協案を探れという指示が出た。

そこで、真田技師長が暖めていた宇宙戦艦ヤマトの準同型艦、空母シナノの建造計画が注目を集めた。これを参考にして、艦の前半を戦艦の形態とし、後半を空母形態とする案は、ヤマトをこの形で復元できれば両者の妥協点に最適であった。何しろ主砲を四連装にすれば、第3砲塔が消滅しても第1砲塔と第2砲塔だけで8門を確保できる。現状の9門から1門減るだけなのだ。それでいて本格的な航空機取り扱いスペースを確保できるなら文句はない。

ところが、ここで思わぬ問題が起きた。

搭載予定だったコスモタイガーの雷撃機型に欠陥が発見されて飛行停止になったが、これが解決できる見込みは無いというのだ。全機退役さえも噂されていた。機体を用意できないのなら、大型の空母を用意する意味は無い。

更に、資材の払底、人材の不足の深刻であり、とてもヤマトをより大型に組み直せる状況ではなかった。下手をすれば、解体したヤマトすら復興資材として供出を要求されかねない状況だった。

既に打てる手はなかった。

ヤマトを元通りに組み直すことすら既に無理だった。

複雑精緻で、しかもワンオフの専用モデルとなっていた波動エンジンや波動砲をもう1つ作るなど、人材払底を理由に地球防衛すら無人艦隊に任せざるを得ない状況では無理な話だった。

結局、宇宙戦艦ヤマトは、波動実験艦ムサシ用のスーパーチャージャー付き波動エンジンと、新波動砲という実績の乏しい実験用装備を取り付けて、その他全地球レーダーなどの新装備も含めて元のサイズと大差ないサイズで組み立てられることになった。戦力の不足は波動カートリッジ弾のような新装備で補うことになった。

結局、この判断は正しかった。

竣工した宇宙戦艦ヤマトの使用実績は良好であり、スーパーチャージャー付き波動エンジンは暗黒星団戦役で迅速な敵母星との往復に貢献し、新波動砲は敵母星の撃破に成功した。

しかし、暗黒星団帝国が地球侵攻を開始したとき、宇宙戦艦ヤマトはまだ最後の仕上げ段階にあって出撃できなかった。イカルス天文台では各惑星を無力化して進む重核子爆弾の姿は捉えられており、もしもその時点で宇宙戦艦ヤマトの組み立てが終わっていたら、ワープで重核子爆弾の前に出て新波動砲でこれを撃破してしまうことも可能であっただろう。

繰り返される会議と方針の混迷により、ヤマトをどうするのがいつまでも決まらず、結果として反撃の時期を逸してしまったのは残念だ。

あの時、白色彗星が宇宙戦艦ヤマトに大きな衝撃を与えていなければ、

これほどの混乱は起きなかつたらう。

これこそが、ゾォーダー大帝が残した最後の勝利とも言える。

だが、この事件から伝説的な宇宙戦艦ヤマトに対して過度な期待は禁物という認識が生まれ、ヤマトの拡大計画は鳴りを潜めた。その代わり世界各国で最低限の有人艦隊が復活したのは皮肉なことである。確かに大敗はしたものの、地球艦隊はディンギルによる地球侵攻を阻止できたのだ。暗黒星団帝国に可能だった本土上陸を、ディンギルには許さなかつたのだ。それもこれも、ゾォーダー大帝が残した混乱の帰結と言えるのだ。

おわり

## ナスカの征けぬ宇宙(そら)はなし

冥王星のプルート第1基地に、巨大な宇宙船が翼を休めていた。

それは、とても地球製の宇宙船には見えなかった。あまりにもデザインが異質すぎたのだ。

それもそのはず。

それは、地球で建造されたものではなかった。

ナスカ級中型空母、レスカ。

ガトランティス製だった。

ガトランティスでは傑作中型空母と呼ばれている。

タイプシップのナスカが就役した際には、歌まで作られた。その後、ナスカ級が就役するごとに演奏が繰り返された。

### 我らは喰らわん仇手の肝を♪

### ナスカの征けぬ宇宙(そら)はなし♪

だがナスカは沈んだ。

白色彗星戦役後に、少数の彗星帝国人は地球側に投降し、その後外惑星系で傭兵のようなことをしている。

外惑星系でささやかな軍事力の存在感を示し、それによって報酬を得ているのだ。

いつかアンドロメダ星雲に残った同胞が第2の白色彗星を作り、地球に来るまではこの立場は変わりそうもない。

レスカは、ゆっくりとランウェイを移動し、離床ポジションに移動した。

ここはかつてガミラスの前線基地があった場所だが、氷に閉ざされた極寒の地だ。よくこんな場所で耐えられたものだとレスカ艦長カフェオレは思った。

ここに住んでいる地球人はユダヤ教徒が多かった。

どうやら、彼らの聖地エルサレムは緊張が絶えないらしい。新天地を開

拓する方がよほど安定していると彼らがぼやいているのを聞いたことがある。

ナスカ級はエンジンが離床出力になると急角度で空に上がっていった。

その日は、ユダヤ教徒にとって宗教的休日だったからだ。衝撃波はどうしても居住区に到達してしまうし、それによって不評は起きる。しかし、ここまで来て彼らには他に行くあてなどないのだ。ユダヤ教徒の不評は最小限に抑えるに限る。

ナスカ級は、そのまま冥王星の海の上を飛び続ける。

イギリス隊の管制区域に入った。

通信指揮官から呼びかけてきた。

「ハマナ、ハマナ、こちらはウィリー。応答されたし」

ハマナはナスカ級レスカの符牒だった。地球製の宇宙船が来るか、彗星帝国の宇宙船が来るかで態度を変える相手もいるので、どちらが来るか分からないように符牒を使っているのだ。

「こちらはハマナ、ウィリーどうぞ」カフェオレは答えた。

航宙統制を実施しているのは衛星軌道上のイギリス艦隊だったが、通信に強いパトロール艦が中心にいて、あとは駆逐艦が数隻のみ。レスカが総攻撃を掛ければ一瞬で蹴散らせるだろう。もちろん、それはやらない。地球艦隊の報復は、はるかに恐ろしいし、しかもカフェオレに残存彗星帝国人には他に行くところなど無いのだ。

「ハマナ。そうだ、サイダーを飲むか？」

「ウィリー。あの透明で泡が立っている飲み物か？ 悪いな。あれは口に合わない」

「それは悪かった。じゃあミルクでもどうだ？」

「地球人の男が女に言うミルクとは、淫らな意味を含む隠語だと学んだよ」

「考えすぎだ」

「仕事の話をしよう。我々は傭兵だ。軍事力を提供して報酬を得る」

「いいだろう。装備内容を通告願う」



「当方は定期武装偵察任務で航行中。装備形式は B 型」

「正確に通告されたい」

カフェオレは舌打ちした。

通常は、タイプを通告するだけで良いはずだ。それを認めないとすれば、相手が余程のへそ曲がりか、あるいは何か面倒なことが起こっているかだ。

「ウィリー、こちらの装備はデスバテーター 8 機。ブラックタイガー 8 機。全機対地ミサイル装備」

デスバテーターは消耗しても補充ができないので、数は減る一方だ。代わりに提供された旧式機のブラックタイガーは無いよりマシという程度だった。本当は最新のコスモタイガー II があれば戦力的にバランスが取れるのだが、そこまで彗星帝国人は信用されていないらしい。

「状況八号。想定エイヴル。ただし、ブラックタイガーでのみ任務を実施せよ。以上、確認せよ」

「確認する間、レスカは衛星軌道で周回する。許可されたい」

「許可する」

カフェオレは命令書の束から状況八号のファイルを探した。

封を切って、命令書を開いた。

指示された特定の座標への対地攻撃。

珍しいことではない。

冥王星にはガミラスの置き土産としての自動砲台がまだ多数残っていて、これに対処する最も楽な方法はミサイルを撃ち込んで破壊してしまうことだった。悠長に解体することは論外だった。自衛のための戦闘力があり、非武装の技術者が接近することは不可能だった。

結局のところ、問題の核心はそこにあった。

冥王星の原住生物が意図せずしてガミラスが残した自動砲台に接近してしまい、撃たれるという事態が多発していた。地球政府はそれを見逃せなかったのだ。より正確に言えば、見逃せないのは納税者の民意だった。冥王星の原住生物の危機を訴える自然保護団体の声が納税者の民意を動かしたからだ。つまり、次の選挙のことを考えれば、救える原住生物を救わな

いという選択肢はあり得なかった。冥王星に基地はあり、そこにレスカを始めとする無視できない戦力が常駐していたからだ。

だが、地球から遠く離れた準惑星に、無視できない戦力を常駐させておくコスト負担も馬鹿にならなかった。そもそも、ワープエンジンの生産と普及が進んだ地球連邦において、太陽系内の前線基地に存在意義など無かったのだ。各惑星の基地は徐々に縮小し、月面基地への集約が進んでいた。

それにも関わらず冥王星の基地が依然として健在となっているのには理由があった。

洪水に押し流されたガミラス基地を再建して地球人が占拠して使用している。その事実こそ意味があったのだ。対ガミラス戦勝者としての象徴だった。

だが、徐々に対ガミラス戦の記憶は薄れつつあり、莫大な維持コストを要する冥王星基地への風当たりは強くなる一方だった。

カフェオレは命令書の座標を冥王星の地図と照らし合わせた。

そこには既知の砲台は存在しなかった。

それはいい。

既知の砲台はあらかた破壊されていて、今更破壊命令などは来ないからだ。

今来るとすれば、冥王星マニア、原住生物保護マニアが発見してくる、未知の砲台に関する情報だからだ。

だが、これは……。

「ハマナ、ウィリー。座標値を確認したい」

カフェオレは座標を読み上げた。

「ウィリー了解」ウィリーが座標を読み上げた。

間違っていない。

「ウィリー、ちょっと質問してもいいか？」

「ハマナ、こちらが答えられることなら」

「いったいどういうことなんだ」

「数時間前、残存ガミラスパトロール艦が、そこを占拠した」

残存ガミラスパトロール艦、たまに発見される残存ガミラス戦力だ。かつての冥王星基地配下の生き残りだ。未だに生き残っている者は、潜伏して出てこないことが多いが、こうして襲ってくる連中がいないわけではない。

「それだけか？」

確かに、占拠しただけならいきなり対地ミサイルの斉射を行うには弱い。

「連中は虐殺を行っている。原住生物愛好者同盟の要請だ」

「なんてことだ。連中、それで平気なのか？」

「わかるもんか」

統制官の自制は突如としてくずれた。

「この素晴らしい(ブラディ)冥王星で人道的な(ブラディ)保護活動をやっている連中が、なんとも至極当然の(ブラディ)要請を我が地球防衛会議に出し、そこの阿呆(ブラディ)どもが承認したんだ。それで相対的な平穏が保たれると判断して。わかったか？」

「了解。すまなかった」

「いいんだ。大変(ブラディ)なのはそっちだからな」

「ハマナ。命令受領。行動に移る」

「ハマナ、ウィリー了解。幸運と神の御恵みを。拝んでいる神はこっちと違うかもしれんが、ともかく御恵みのあらんことを」

こちらの神は君らが殺したよ。ズォーダー大帝万歳。カフェオレはその言葉を口にしなかった。少なくともウィリーは良い奴だったからだ。

飛行隊長がブリッジに出頭した。

「ご指示を」

「ブラックタイガー8機で出撃する。高度13万ないし14万メートルから全機対地ミサイル斉射。その後レスカに帰投する」カフェオレは指示を出した。「待機中の装備に変更はない」

「問題はありますが……」

「なんだ、いってみろ」

「全弾使用すると、ひどいことになります。デスバテーターが装備する

高精度誘導ミサイルと違って、ブラックタイガーが釣り下げているのは、広域制圧ミサイルです」

そうだった。命中精度が期待できない旧式機なので、ブラックタイガーが装備する対地ミサイルはそれほど精度が要求されない広域制圧ミサイルだった。そして、これを使用する機種は、ブラックタイガーしかあり得なかった。こういう効率の悪い兵器を、より新型の機体は装備しないのだ。

しかし、カフェオレは返答した。

「分かっている。だが、命令が出ている。我々は傭兵として命令に逆らえない」

「了解。申し訳ありませんでした」

「いやいい。他には？」

沈黙。

「よろしい、これから出撃せよ」

8機のブラックタイガーが格納庫から引き出され、レスカを発艦していった。ブラックタイガーはカタパルト発進できる構造ではなかったので、自力で加速して初速を得ねばならない。面倒なものだと思っただが、ブラックタイガーの反動推進剤を節約させるために、レスカの艦首を目的地に向けた。

地球では、これを【艦首を風に立てよ】というらしいが、語源までは知らなかった。

冥王星を巡る反射衛星は、全て測位衛星に改造されていた。その衛星からの電波を複数つかまえることで、現在位置が精密に測定可能だった。それにより位置を修正しつつ、ブラックタイガー8機は徐々に高度を落とし、所定の高度で全弾を発射した。

自分が狙われたときに発動する自動砲台の反撃はなかった。また、パトロール艦があれば当然来るはずの対空迎撃もなかった。

広域制圧ミサイルは予定通りに散開を始めた。

1発あたりの危害半径 370 メートル。これがブラックタイガー1機あたり4発装備。8機で出撃したので合計 32 発だ。かなり広範囲が完全に焼き

尽くされただろう。そこにガミラス兵がいれば生きてはいまい。ガミラス兵が……。

「ウィリー、ハマナ。任務完了。目標に多数の爆発と火災発生を確認。ブラックタイガーに戦果確認を行わせるか？」

「ハマナ、ウィリー。必要無し。確認は夜明けを待ってこちらから偵察機を派遣する。貴艦は帰投せよ。ご苦労でした」

「ウィリー、ハマナ。了解。あんたとこのような場所で会ったのが残念だ」

「ハマナ、それはこっちも同様だ。さようなら」

レスカは、重量物を運んだために燃料が切れかかっているブラックタイガーを収容するために加速して前に出た。

そして、艦載機の収容が終わったレスカは冥王星基地に帰還することになった。

「航海長。回頭(コースターン)するのと同じ軌道を航行して冥王星を一周するのではどちらが早い？」カフェオレが質問した。

「この位置なら、冥王星を一回りした方が早いでしょう」

「ではその航路で帰投する。詳細は航海長に任せる」

カフェオレは無意識のうちに胸をさすった。

何か違和感があった。

先ほど目標を確認するために用いたチャートを胸ポケットに入れていたのだ。

カフェオレはチャートを開いた。

だが、ブリッジの照明が落ちた。

「1 分間の全力加速で進路を変更します」と航海長が言った。「その間、エネルギー不足で照明が落ちますがご勘弁を」

レスカの主機の 1 つがいつも不調だったが修理用の部品は手に入る見込みが無かった。そのせいだ。

不思議なことに、照明が消えているのに、そこに何が記されているのか十分に分かった。

プルート・トーキョー。冥王星原住生物の大群生地だ。丘の上には、保護団体の大型キャンプもある。

カフェオレの手で、彗星帝国で言えば都市帝国のようなものか、と書き込みがあった。

カフェオレはそこを攻撃させた。

原住生物は石で簡単な住居を作ると言われていた。

それが、広域制圧ミサイルの破壊効果を遮ってくれれば良いが。

だが、カフェオレはそれが空しい望みであることを承知していた。

広域制圧ミサイルの炸裂中心の温度は恒星に匹敵し、石も解かしてしまう。

周辺部の石は溶けないかもしれないが、原住生物が生きるために必要な元素を全て奪ってしまう。

どれほどの被害がでているのだろうか、とカフェオレは思った。

全滅したとは思わないが、ガミラス人が行った虐殺以上の殺戮が行われたことは確かだった。

状況八号。想定エイヴルとは、それを許容する命令だった。

極端な軍事力が行使された時、それを阻止するために無制限の対抗措置が許容される。

立案したのはどんな連中だろうとカフェオレは思った。地球防衛会議だろうか。血圧が高まってきた。

連中は、ここで行われているような前線の存在しない戦いで、過度の物理力の行使が何をもたらすのか分かっているのだろうか。

何とも言えない感覚だった。

かつて、彗星帝国のナスカ級レスカとして様々な星を殲滅していた時とは全く異なっていた。あの頃は、殲滅に疑問を感じてはいなかった。

理由は簡単だったからだ。自分が参加した戦争の構造を内心で単純化できたからだ。テレサが母国に立ち向かう。戦う。地球がテレサ側について参戦した。戦う。それだけだった。滅んでも自業自得というやつだ、と。

だが、殺戮の地となりはてた原住生物の群生地を破壊した今は違った。

どこかに納得しきれない思いがあった。たとえていえば、カフェオレは自分が安楽死を求める患者の懇願にこたえた医師と同じ立場にあると気づいていたのだった。

この攻撃で、地球連邦政府はどんな利益を得るのだろうか、とカフェオレは思った。

カフェオレは思いつけなかった。

もしかしたら……。

別の可能性に気づいて、カフェオレは顔をゆがめた。

まさか原住生物保護という名目を自らの手ではぎとってみせたわけじゃなかるうな。

あえて、原住生物保護派の批難を高め、冥王星撤退の切っ掛けを掴む。そんな術策を誰かが思いついたのではないだろうか。

いや、わかりはしない。

案外その通りなのかもしれない。

維持に金を食いすぎる冥王星基地は単なる対ガミラス戦の戦勝記念モニュメントであり、もともと存続させる意味が無い基地なのだ。原住生物を保護するどころか傷つける地球連邦軍は出て行け、という風潮ができれば原住生物保護に必要なだから基地を維持せよという要請を退けて基地の放棄が可能だ。しかも全機ブラックタイガーで攻撃は行われた。彗星帝国残党の嫌がらせという解釈すら入れようが無い。批判は確実に地球連邦政府に向く。健全な復興財源を捻出するという意味ではまったく妥当な判断とすら言える。

カフェオレは口元と大きく歪めた。笑いとも怒りともつかない表情だった。しかし、照明がないおかげで、カフェオレは気づかれずに済んだ。

なんたることよ、とカフェオレは思った。

すばらしき世界。

予算の健全性を維持するためには虐殺の許される世界。

自分のようにナスカ級を指揮できていれば満足だという人間達が熱心に

義務を果たしていく世界。おそらくは、白色彗星が再び輝く瞬間ですら、それに変わりはないだろう。

全ては相対的な地球圏の繁栄のために、非武装中立と全面戦争の間に存在するあらゆる術策が肯定される。

だが、最終的に全面戦争が行われる可能性が高い。誰もかれも豊かになることを望むからだ。非武装中立は何かを捨てねば実現出来ないが、全面戦争は戦費さえ払えるなら誰にでも始められるからだ。

そこには必ずや、このナスカ級の姿があるだろう。

なぜだって？

決まっているじゃないか。

それこそ我らの栄えある使命であるからだ。

そう。

ナスカの征けぬ宇宙(そら)なんて、この世にありはしないのだ。

おわり



## 宇宙戦隊<隼>

いわゆる特殊作戦の目的は、戦略的、作戦的に致命的な問題となり得る対象を最も軽微な予算で除去することにある。言うまでも無いことだが、この種の作戦の達成は極めて難しい。十分に訓練された人材を特別な装備が必要とされる上に、成功も困難だからだ。

しかし、国家や軍隊はこの種の特殊作戦を好む。なぜなら圧倒的に安上がりだからだ。

たとえば、都市帝国の動力炉破壊は斎藤始たった1人の力で成し遂げられた。突入を支援するために失われた数十名の命を加えても、その程度のものである。

一方で、都市帝国ほどではないと評価されるバルゼー艦隊との戦闘で、高価な戦艦アンドロメダ以下の地球艦隊主力は大損害を喫した。

どちらが安く付いただろうか。

要するに、特殊作戦とは純粋に経済的な要請によって行われる経費節減策と言っても良い。

どれほど優秀な兵士が失われようと、主力戦艦1隻が乗員ごと失われる事態に比べれば安く付くのである。

しかし、名誉の問題は別である。軍隊という組織は、それを守るためであれば、いかなる手段の行使も辞さない。

地球防衛軍報道部のハヤブサ・ケンが転属を命じられた。

8823 艦隊報道班長。

「栄転とは思えない。なんか、とんでもない島流しのような気がするなあ」

ケン思った。

陸上部隊なのは間違いないとだけは分かった。たとえば、惑星や衛星の守備隊だ。8823 という艦隊番号は、情報秘匿のために陸上配備部隊に与えられる別称だった。

おそらく本当の名前は、月基地会計隊とか、ダイモス基地報道班のよう

な名前に違いない。

分からないのは、自分がなぜそのような部隊に配属されるかだった。

上司も分からなかった。

問い合わせても現地で説明を受けよというだけで、命令に説明はなかった。

ケンには、地球防衛軍の駆逐艦に便乗して、アステロイドベルトのケレス基地に移動した。しかし、そこは目的地ではなかった、そこからランチで名前も存在しないような小さな岩の塊に移動することになった。

ランチを降りて扉を見ると【633 工兵隊工区】の名前が掲げられていた。これが部隊の名前らしい。

「これが真の名前か」

「いえ」と案内の下士官が言った。「これは秘匿名称です。正しくは【633 特殊爆撃隊】といいます」

「爆撃隊?」ケンには首を捻った。自分はパイロットではないのだがな。

「風!」壁の向こうの誰かが叫んだ。

「谷!」案内の下士官が叫んだ。

それでドアが開いた。

中に入ると黒く塗られた精悍な戦闘機が整備中だった。

「これは凄いな。新式の爆撃機なのか?」

「コスモファルコンをベースに開発された夜間戦闘機ナイトファイターです」

「夜間? 宇宙に昼や夜があるのか?」

「これも秘匿名称と言う奴でして」

「本当の名前はなんだ?」

「九九式双発隠密襲撃機です」

「余程の軍事機密らしいな」

「ええ。ベース機体こそよくあるコスモファルコンですがね。対探知特殊塗料と対探知フィールドを展開して、敵に察知されることを避けます。そして、アステロイドに蔭で敵を待ち、コクピット後方に装備された斜め

銃を至近距離から撃ち込んで敵艦を仕留めます」

「凄い兵器だな。足りない指摘されたステルス性能は、アステロイドの活用で補っているわけだな？」

「そういうことになります。構想の上では」

「だが、みんなは何と呼んでいるんだ？」

「ハヤブサですね。原型機がファルコンでしょう？」

「俺の名前もハヤブサ・ケンだよ」

「それは奇遇ですね」

「ここに来て良かったのかも知れない」

「では説明します。こちらから、機体の愛称はガンテツ、ムツ、カミカゼ、サクラです。現在準備中の新機体はハヤブサ・ケンさんにちなんでケンにでもしましょうか」

「それは光栄だ。ハヤブサ・ケンが大戦果を上げてくれれば、これほど嬉しいことはない」

その時、下士官の顔が曇った。

丁度、この基地の司令官がやって来た。

「新しい報道担当官ですな。基地司令の西園寺です。戦果は無理かも知れませんが」

「どういうことだ？」

「この部隊の話が、噂にも出ないことに疑問を感じませんか？」

「機密部隊だからでしょう？」

「そうではありません」

「じゃあなんだ？」

「戦果が上がっていないのです」

「上がっていない？」

「ガミラスのパトロール艦一隻撃沈不確実。補給船一隻撃沈、三隻不確実。これが、この部隊の戦果の全てです」

「そんな馬鹿な。通常部隊の方がよほど戦果をだしているぞ」

「そうです」

「しかし、ここは【633 特殊爆撃隊】の実力を最大限に発揮できるように選ばれた根拠地ではないのか？」

「その通りです。隠れるアステロイド、航行する敵艦、安定した根拠地、機密の確保。必要な全て条件が揃っているのに、戦果が出ないのです」

「なぜだ」

「見て下さい。完全な隠密性を確保するには、機体を全て塗り直さねばなりません。すぐには再出撃できないのです」

「それにどんな意味が？」

「しかし、敵はそんなこちらの都合に関係なく来ます。整備中だと敵が来ても出撃ができません」

「1機ずつ時間差で待機させたらどうなんだね？」

「敵の進路は絞り込めないので、全機で待機する必要があります」

ケンは無言でこぼした。

何が起きているのかは明白だった。

九九式双発隠密襲撃機の開発は失敗だ。

だが、おそらく誰か偉い人が推進したのだろう。面子のためには失敗扱いはできない。しかも、今は対ガミラス戦を遂行中なのだ。軍が効力も無い兵器に金を使ったと分かれば、批難も集中するだろう。だが、軍としてはこれを避けねばならない。ただでさえ劣勢なのだ。民衆まで敵に回したら敗北を回避できない。

「では戦果がないなら、自分の仕事はなんでしょう？」

「報道班員の仕事はひとつだけでしょう」

西園寺は答えた。

「味方にはとっては頼もしく、敵に取っては恐ろしい情報を公開することですよ」

その時、ケンは天啓のごとく閃いた。

なぜ自分がここに来たのか。

そういうことか。

少なくとも、この戦争が続くあいだは失敗を認めるわけにはいかない。

民衆に無用の不信感を巻き起こすからだ。戦争に向けられた努力の全ては有効なものであると信じさせねばならない。

敵は常に間違っており、我はいつも正しい。その幻想を維持しなければならない。でなければ、星間国家戦争という現実には民衆が耐えられなくなってしまう。

これをケン自身の立場に当てはめればこうなる。

この部隊に存在意義はもう無い。

だが、それを認めることは到底出来ない。九九式双発隠密襲撃機は恐ろしい武器であり、8823 艦隊は 1 個艦隊にも匹敵する強大な戦力だと信じられねばならない。前線の兵士や銃後の民衆だけでなく、敵にさえも。誰もが 8823 艦隊と聞くだけで震え上がる状況を作らねばならない。それが誰の面子も潰さず、なおかつ、これまで払われてきた努力から最大限の成果を得る方法だった。

「まあ、やってみましょう」ケンはやった。

「何か必要なものはありますか？」

「そうですね。やはり、敵の喪失艦の情報でしょうか。喪失が原因不明であればなお良いです」

「分かりました。それが我が部隊の輝ける戦果になるわけですね」

「報道時に使用する部隊呼称は何にしましょうか？」

「どうぞご自由に」

「そうですねえ」

【633 特殊爆撃隊】では堅苦しすぎるし意味も分かりにくい。8823 艦隊は論外だ。いや、強引に読んでしまえば良いのか。8823 をハヤブサと呼んでしまえば、機体の通称とも一致する。

「ハヤブサ部隊。いや、宇宙戦隊ハヤブサではどうでしょう？ これなら子供でも覚えられます。機体の名前も九九式双発隠密襲撃機では重苦しい。マシン・ハヤブサにしましょう」

「好きにしてください」西園寺は苦笑した。

その時ケンは気づいた。

これだけの戦果を上げたことになる部隊だ。

戦争の全期間をこのアステロイドで過ごしただけで、普通以上の感状や勲章を授けられるだろう。昇進もするだろう。

「これも戦争なんですかね?」

「すくなくとも自分にとってはそのですね」

西園寺は言った。「宇宙戦隊ハヤブサ! マシン・ハヤブサをかって味方からは信頼を、敵からは畏怖と賞賛をもってみつめられる秘密戦隊! どうせなら自分が指揮する部隊がそうであって欲しかった」

ケンは何も言わなかった。

西園寺はケンの戦争に巻き込まれた不幸な男に過ぎないのだ。

であるならば、これはやはり栄転なのかもしれなかった。

怪しげな情報を操り、成果をえる。報道という部署に所属する自分の仕事はそれだ。ここに、その仕事を実行できる機会が存在している。満足すべきだろう。そう、満足すべきだ。自分に向いた仕事を、全くの自己裁量で行える人間など、この世にそうはいないのだ。

おわり

## 戦艦<フリーデブルグ>の最期

地球からアマールに向かう第3次移民船団の勇戦の物語は有名であるが、その後続く第4次移民船団は情報統制が有効であったために無名である。

真田の深慮遠謀で用意された計画は、こうだった。

2つの移民船団を、時間差を持って出発させると先行した移民船団が敵の主力を引き付け、後発の移民船団は比較的安全にアマールに到着出来るだろうというものだった。

当然、イレギュラーな第4次移民船団に付けられる護衛はたかが知れていた。

旗艦は旧アンドロメダ級ナガト。かつては地球連邦艦隊の旗艦を努めた名艦であったが、時代遅れの老嬢であることは否めなかった。続くのはボラー戦役で大破後に修復されたプリンス・オブ・ウェールズ(POW)だった。

その後には、大小補助艦艇が続いた。

イスラエルの国旗を掲げた駆逐艦のとなり、イスラム国家の巡洋艦さえ並んでいた。

人類存亡の危機に、もはや宗教対立さえ遠いものになっていた。

POW 艦長は、この艦隊を眺めながら無事にアマールに到着出来ることだけを願っていた。しかし、先頭を進む旗艦旧アンドロメダ級ナガトはあまりにも旧式で非力に見えた。POW よりも古いのだ。本物の敵が出現しないことだけを願った。

「フリーデブルグさえあれば、我々の夏は続くぞ」と誇らしげに第1艦隊司令は惚れ惚れとした視線でフリーデブルグの艦橋を見回した。

「それはフリーデの夏ですか？ それとも大ウルップ星間国家連合の夏ですか？」とフリーデブルグ艦長は質問した。

「両方だ」満面の笑みで司令官は答えた。

大ウルップ星間国家連合にあって、フリーデ第1艦隊は完全に出遅れていた。

フリーデの威信を掛けて作られた戦艦フリーデブルグを擁するこの艦隊

はフリーデの華とも言えるものであったが、フリーデブルグの機関トラブルにより出撃が遅れた。そのため、他のフリーデ艦隊と共同で対地球戦に入れずにいた。

しかし、それはあまり好ましいことではなかった。

地球の第1次船団はワンサイドゲームで蹴散らせた。

だが第2次船団は粘った。

この調子で地球人が学習を続ければ、第3次船団はもっと手強いだろう。

それに対抗するためのフリーデブルグの投入だった。それが出遅れてしまったのだ。

だが、それは結果として良い方向に作用した。

フリーデ第1艦隊は、第4次移民船団を発見したのだ。

応援は期待できなかった。他の大ウルップ星間国家連合の各艦隊は第3次移民船団攻撃から手が離せないのだ。

「いかがしますか?」フリーデブルグの艦長が質問した。

「やるぞ」フリーデブルグの艦橋で艦隊司令官が宣言した。「我々はこちらの船団をやる。他の誰にも連絡はしない」

戦果の独り占めというわけか。艦長は納得して指示に従った。

いかに艦齢が古くとも、ここで退けば移民船が剥き出しになる。彼らが移民船に対して虐殺を行うことは既に分かっていたことだ。

ここで退くことはできない凄みがひしひしと感じられた。

旗艦がまた発砲した。

「本艦も負けるな。撃て撃て!」POW艦長は叫んだ。

そのとき、何回目かの砲撃が、旗艦ナガトを夾叉した。

何かの炎が派手に飛び散った。

POWのブリッジで、艦長は目を見張って先行するナガトを見た。

それでも老嬢ナガトはまた発砲した。

艦長は感嘆の声を上げた。自動砲撃装置のアンテナがねじ曲がっているのにまだ撃つとは。砲手が目視で照準しているに違いない。まさに死にも



のぐるいだ。

部下の通信士が報告した。

「旗艦が射撃データを送信しています。本艦にはありません」

艦隊司令官は、望遠スコープでナガトを見守りながら言った。

「まだ発砲できるのか。なんと戦艦とはタフな怪物であることか」

「しかし、このままでは移民船を逃してしまいます」艦長が進言した。

「そうだな。本来の目標は移民船だ。敵の戦艦はフリーデブルグだけでやれる。残りの艦隊は移民船団を追撃させよう」

フリーデ戦艦部隊が、転舵を始めた。

その時、彼らの頭上から降ってきた波動カートリッジ弾は9発だった。

綺麗なグルーピングを描きながら先頭の戦艦を夾叉し、その一発が戦艦を貫通して爆発させた。

「何事だ!」司令官は叫んだ。

「地球連邦軍は伝統的に実体弾に蛍光色の染料を塗っています」

「だからどうした」

「赤色は第1戦隊、地球最強の戦艦部隊の色です」

「だが、あれは通常砲弾ではありえない。波動エネルギーを詰めた砲弾だ」

「波動カートリッジ弾です」

「それが撃てる戦艦はヤマトしか存在しないはずだ。だがそれはとっくに沈んでいるはずだ」

「奴等はヤマトを引き上げて再就役させた。それだけのことでしょう」

「だが、データにあるヤマトの攻撃力を上回っているぞ」

「改良したんでしょう。まるで怪物です」

「怪物か。だかこちらもフリーデ最強の怪物だ。戦艦部隊を呼び戻せ。やるぞ」

宇宙戦艦ヤマトの艦橋で古代進は仁王立ちになっていた。

「冬月から入電。宇宙気流に飲まれ、追従できず」通信士が報告した。

「後から来いと伝えろ」古代進は答えた。

僚艦は全て宇宙気流を乗り切れずに脱落していた。

ヤマトの真田特製の波動エンジンだけが宇宙気流を乗り切るパワーをヤマトに与えていた。

しかし、これを乗り切らなくては第4次船団に駆けつけることができない。

これは真田からの密命だった。

存在を秘匿した第4次船団が出航するので、何かあれば救援に向かえというのだ。

古代はそうした。

第3次移民船団の最終ワープに成功すると、アマールに向けてワープすると見せかけてこの場に乗り込んできたのだ。

「現在光速の30%で航行中」

「30%? もっと出せるだろう。波動エンジンが壊れても構わない。全速だ」

ヤマトとフリーデブルグの距離が接近するにつれ、相互の強力な砲弾の破壊力はより一層発揮されるようになって言った。

双方が満身創痍のまま、砲撃戦は続いた。

「行けるぞ」司令官は興奮した。「増援はヤマトだけだ。ヤマトがいくら強いと言っても、こちらは数で勝る」

そう簡単に行くだろうか、艦長は疑問に思った。

彼らは必死だ。まさに負ければ死ぬ。それに対して、フリーデ艦隊の兵士は腰が引けていた。SUSに脅されて戦っているだけだったからだ。

だが次の瞬間、艦橋に直撃弾があった。

艦長は爆風に煽られて床に叩き付けられた。

起き上がると艦橋は廃墟も同然だった。

生きている者はほとんどいなかった。

司令官はほとんどが無事に椅子の上にあった。首から上を除いては。

艦長は立ち上がるとまだ稼動しているスコープを覗き込んだ。

到着が遅れていたらしい敵の増援が後方から到着しつつあった。

こうなるなら、フリーデも増援を呼んでおくべきだった。

戦果を独り占めしようなどと姑息なことを考えていた自分を恥じた。

応急修理が完了したらしいナガトと POW の砲撃も再開されていた。

「この戦いは負けだ。我々の夏は終わった。これから堪え忍ぶべき秋と冬がやってくるだろう。ここで何もかも失うわけにはいかないのだ。全艦撤退せよ。このフリーデブルグが盾になってあげられる間にな」

ヤマトの波動エンジンが爆発寸前になり、速度を落とさねばならなくなつたとき、僚艦がやっと追いついて射撃を始めた。

これで形勢は決まった。

「真帆、この戦いの記録は全て消去しておけ」と古代は命じた。

「なぜですか?」

「第4次移民船団は真田さんが発案した【無かったはずの船団】だ。記録に残ると次は作戦が読まれてしまう可能性がある」

「分かりました。公式記録から全てを消去します」

「あのデカ物に波動砲をお見舞いしますか?」と上條が振り返った。

「それは僚艦に任せよう。本艦はよく耐えた。上條もよくやった」

「ありがとうございます!」

フリーデブルグの巨体が割りこんで、追撃戦はあまり上手く行かなかった。

ナガトの拡散波動砲が発射されて、フリーデブルグを包んだが装甲を貫通できなかった。しかし、効果は見られた。

突如、POW の艦長は奇妙な感情に囚われた。それは日曜の朝に天に最も近い場所で感じた何かだった。なぜか、フリーデブルグを見てこれまで感

じていた好戦的な感情が唾棄すべきものに思えてきた。他の残存艦も次々とフリーデブルグに波動砲を発射した。彼が POW にも波動砲の発射を命じたのは、英国宇宙軍軍人としての義務感からであり、他の何の理由もなかった。

そして、数分後にフリーデブルグが起こした最後の爆発を目撃した彼は胸で小さく十時を切り、ささやくような声で死にゆく者への祈りと唱え始めた。

終わり

## 解説

身も蓋も無い解説を追加することに意味があるのかと思うが追加することにした。話が感動的過ぎるからである。

本短編集は佐藤大輔のレッドサンブラッククロスの外伝のいくつかのエピソードに宇宙戦艦ヤマト世界の設定を当てはめたものである。時々違うものが混ざっているが気にしてはいけない。

### ゾーダー大帝最後の勝利

【フリードリッヒ大王最後の勝利】である。船頭が多いと船が陸に上がる話をヤマトでやってみたかっただけだ。ヤマトほどの殊勲艦なら修理 1 つにしても様々な主張に揉まれて先に進まないだろう考えた。

### ナスカの征けぬ宇宙(そら)はなし

【飛鳥の征けぬ空はなし】である。ひたすら、飛鳥をナスカに読み替えて話を作り直しただけ。レッドサンブラッククロスにあってトップクラスのダークな話なので、忠実に書くと凄くダークになる。それでいいのかって？ 良いのだ。なぜか？ ナスカの征けぬ宇宙(そら)なんて、この世にありはしないのだ。

なお、ブラックタイガーがカタパルト発進できるかは知らない。できないというのは本作のみの設定だ。ナスカ級にカタパルトがあるか否かも知らない。

### 宇宙戦隊<隼>

【海底戦隊<隼>】である。ひたすら隼をコスモファルコンという解釈でまとめてみた。もともと【海底人 8823】を元ネタにした話なので、これは【もじり】の【もじり】になる。そのことは分かった上でやっている。その上で、あえてハヤブサはマシン・ハヤブサだという解釈も入れている。もはや何を言っているのか分からない。

九九式双発隠密襲撃機という名称は、コスモファルコンが九九式なので、頭に九九式のついた名前をでっちあげてみた。ガミラス戦役中のエピソードなので 2199 年制式採用で九九式というものもある。しかし艦爆にしなかったのは、ハヤブサなら陸軍機だから。陸軍機で九九式なら九九式双発軽

爆撃機でしょう。ってことで双発になっている。コスモファルコンも双発だし。隠密はこっちで勝手に付けた言葉で、襲撃機は旧日本陸軍機に存在する名称だが、隠密襲撃機はこっそり襲っちゃうぞというイメージで。ちょっと意味合いが史実と違う。

夜間戦闘機ナイトファイターは、小林誠デザインのナイトファイターに由来するのだが、正しくは騎士のナイトである。対探知塗料で黒く塗られた戦闘機を夜間戦闘機と解釈し、騎士のナイトを夜のナイトとあえて誤読して使用している。

### 戦艦<フリーデブルグ>の最期

【戦艦ヒンデンプルグの最期】である。これのみ出典の外伝集が違う。この話を取り上げる気になったのは、POW が重要な役割で登場し、ヤマト世界にも POW という宇宙戦艦がいるから。あとは、船団護衛はまさに復活篇のイメージに重ねられるので。そこで、映画に存在しない第4次移民船団をでっちあげて、護衛に老嬢ナガトと POW が付いているシチュエーションをでっち上げた。救援にかけつける播磨はヤマトにやらせるとして、こうなると古代進が角田覚治化してしまうが、まあいいか。

この話を書いて面白かったのは、話が完全に復活篇とかぶること。身体を張って味方を守るフリーデブルグは、身体を張って味方を守るヤマトに重なり、それを見て心が動くゴレイはそれを見て心が動く POW 艦長に重なる。

なぜ本作のみの設定であるフリーデブルグが存在するのかと言えば、名称がヒンデンプルグっぽいから。それ以外に理由はない。その理由により、第4次移民船団を襲撃するのはフリーデのみとなっている。

ヤマトの速力が光速の30%になっている理由は、単にこの小説で播磨の速度が30ノットということに由来するだけで、真の設定に準拠しているわけではない。そもそもワープしちゃうえば一瞬でどこにでも行ける。ワープしないのは、単に話の都合上でしかない。波動カートリッジ弾を撃てるのはヤマトだけという設定も、話の都合上設けたその場限りの設定でしかない。公式の設定ではない。ヤマトが第1戦隊というのも、赤い蛍光色の

染料という話も同じである。その場だけのでまかせである。

ちなみに、この話は表面的には【我らのスーパー戦艦が勝利を掴む話】になっているのだが、実際にはひたすらやられる側と傍観者の POW の立場から話が進み、敗者の悲哀を味わう内容になっている皮肉が良いのだ。だから、【波動砲を人に向けて撃ってはいけない】という一種の俺ルールは使用していない。その代わり、撃ってお祈りするのである。祈ったところで罪は消えないが、それでも祈らざるを得ないのだ。私たちにはもう神さまの姿は見えないのだ。神さまが見えるヤマトは嘘のヤマトだ。

### 【テッドさんテーブルクロス外伝】

この言葉には 100%意味が無い。単にレッドサンブラッククロス外伝に言葉が似ているから書かれているに過ぎない。

### 斎藤のごとく倒れよ

考えたが採用しなかったアイデア。元ネタは【勇者のごとく倒れよ】である。1人で動力炉を破壊するような冒険を上手く話にはめこむアイデアを思い付かなかっただけだ。

## 遠野秋彦作品宣伝 2015/4/3 版

### マル計画ロボット第2号【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00V8JT3UK/>

時は2015年。正義をなすために作られたロボット、マルコはテロ組織の都市を破壊した。だが、被害を最小にするためには最善だったと主張するマルコの主張は受け入れられなかった。都市にいた手テロ組織とは関係ない人々を殺すことは社会が許容しなかったからだ。そこから真の正しさ、真の降伏を求めるマルコの長い旅が始まる。やがて、コロッサ計画のロボット、コロッサスがロボットだけの理想郷を作ろうと決起した。はたしてマルコがロボットの側に立つのか。それともマルコの正義を承認しなかった人間の側に立つのか。そもそも、この話はジェッ〇ーマルスなのか、鉄腕ア〇ムなのか、それとももっと別の何かなのか？

### 父殺し戦争【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00OJYDYBU/>

オランダ第2王子ジョークオル・グレスフォは実は女だった。父親の身勝手に男として育てられていたが、ジョアンナと名を変え、女性として別の星の大学に留学していた。

だが、ジョアンナには秘密があった。長年、男だという欺瞞を貫き通してきたジョアンナは男と恋をすることも許されず、いつの間にか獣や異星人しか愛せない体質になっていたのだ。

女なのに男扱いされることに嫌気が差したジョアンナは、留学生のタバチーネ人ドッチーと駆け落ちし、宇宙船プレアデス III で勝手気ままに旅に出た。

ところが、彼らの前に謎の脅威が出現した。

人類を創造したホモ・スペリオールは、密かに人類を去勢して滅ぼす計画を立てていたのだ。ジョアンナは、人類去勢計画を叩きつぶすために実家の兄に連絡を取る。

「オランダ軍の2号反応爆弾を1つ。理由は聞かずに調達してください。兄上の力があればできるはずです」



だが駈け落ちして家出した妹の頼みは聞き入れられるのか?

本当に人類を創造するほど優れた者達に勝てるのか?

オランダの王室に存在しないはずの【皇帝】という肩書きを名乗る人物が出現し、謎の【監視者ファミリー】が暗躍して、ジョアンナを破滅に誘う。

ジョアンナは最後まで降参せず、ぎりぎりの矜持を貫けるのか!?

ホモ・スペリール惑星の惑星破壊ビーム砲台から放たれる超長距離狙撃が人類の居住惑星を次々と破壊していく中、はたして人類に起死回生の策はあるのか?

### アニー・ザ・ピアン・キューティー【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00OJYDW8A/>

レズビアン、世界征服、キューティー・〇ニーという 3 大キーワードを与えられて作者が渾身で挑む問題作。

内蔵された愛情回路に強制されて戦う愛の戦士の悲しい宿命。

レズビアンの巣窟、全寮制、男子禁制の学園に送り込まれたアニーちゃんは男を忘れてしまうのか。

仮面の忍者レッドは敵か味方か。はたまた男か女か。

たった 3 分しか維持できない筋力強化でアニーちゃんは世界を守れるのか!?

アニーちゃんに内蔵された空中【幻想】固定装置を敵から守り抜けるのか?

そして、アニーちゃんの死んだはずのパパが!

### 人造人魚【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00L9D496S/>

コジフ商会のキア・コジフは姉の代理で商談をまとめてきた。しかし、正体不明の MMM という商品が含まれていることに不信を感じた。そして商談の帰路に嵐に巻き込まれた。濁流のクライン川にちらりと見えた人魚はいったい何か。そして、キアは女装のメイドに招かれるままにエム・エムエ幻想国のズィン科学侯爵の屋敷に立ち寄った。だが、その屋敷こそが

謎の商品 MMM の製造場所であった。はたして、こっそり製造されている MMM の正体とは人魚なのか。誰が何のために人魚を求めるのか。そして、河の中に見えた人魚の正体は？ 屋敷の入口にある肖像画の主であるゾ・フィーネという女性はどこに消えたのか？ 謎が謎を呼ぶエロティック幻想物語。

そして、屋敷の謎を解いたキアが選ぶ驚きの選択とは？

君の五感と股間を刺激する！

### コードネームはサターン V 【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L5L4Q2G>

謎を提示するミステリアス小説。解くのは君だ！

独身中年男を心配する親からの依頼で、一人暮らしのダメダメ変態マニア男、佐藤有紀を監視する探偵の鞍馬七郎の物語。

そして、高級マンションで優雅に暮らす佐藤有紀が、セーラーレオタードで美少女戦士に変身して人知れず侵略者と戦うサターン V の物語。

どちらの物語が事実なのか。はたして、佐藤有紀の正体はダメダメ変態マニア男なのか、侵略者と戦うスーパーヒロインなのか。

謎の女、SOS のナナコの正体は、探偵鞍馬七郎の変装なのか。それとも、佐藤有紀をスカウトに来た銀河連邦の宇宙警察機動軍なのか。

矛盾をはらんだ物語が読者を迷宮に誘う。

真実はどこにあるのか。

結論は本文のどこかに書き込まれているぞ。

それを探す冒険物語の第 3 の主人公は読者の君だ！

### ミルクボーイ 【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L9D48WI>

世界は核のスイッチを持つ巨大な 9 人の赤ん坊に支配されていた。

そして、彼らに飲ませるため、教室で搾乳する少女がいた。だがクラスメートは彼女に無理解だった。丹生川タクミは彼女を守るために立ち上がった。

ところが、支配者の 1 人、ホモ疑惑がある七試が男ミルクを所望したこ

とで、話は急転する。タクミも男ミルクを下半身から搾乳される立場になった。

授乳特選隊に入隊したタクミは驚愕の事実を知る。それまで女性隊員しかいなかった極東支部には、女性用の制服しなかったのだ。似合わない女性用制服を着て七試と面会するタクミ。しかし、七試はそれを喜んだ。

はたして、七試はホモなのか？

そもそも、巨大な赤ん坊ベイビーズとは何か？

テロリストに襲撃され、配下のスタッフを多数殺された七試は、怒りに狂っておしゃぶりに偽装した核のスイッチを押した。

はたして、世界は9人の赤ん坊の気まぐれで滅びるのか？

人類は生き延びることができるか？

結末を予測不能の幻想未来冒険譚が始まる！

**リバーシブル【Kindle版 (Amazon)】**

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRVN2>

フォッカーD21で始まり Yak-3で終わるアンドロギュノスの物語。両性具有のセクシーなレースクイーンが、君を妖しく誘惑する。学園祭で模型飛行機を展示していると、ヨーロッパのマイナー機を展示している主人公に興味を示す美女。なぜ、ゴーカーレースの事故の原因を調べてはいけないのか。研究室に出入りする美少女大学生を SM ホテルに連れ込む教授は善人か大悪党なのか。愛する女性の淫らな光景を見ることしか許されない最悪のゲームに主人公は勝利できるのか！

NTR成分もあるよ！

**リ・バース・リバーシブル【Kindle版 (Amazon)】**

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRZ56>

A-1 スカイレーダーで始まり、F9F パンサーで終わるアンドロギュノスの物語。両性具有の女子大生が、一家を襲う難事件に身体を張って立ち向かう。父親の女装ホモ疑惑を必死に解消したと思うと、次は母親の失踪が待っていた。熟女天然ふたなり AV 女優としてネットで晒し者にされる母

親は、本当に自ら望んでそうなったのか、それとも連絡の電子メールは母親を装った偽造なのか！ アンドロギュノスから産まれたアンドロギュノスの娘が、全ての謎に立ち向かう。

リバーシブルで広げた風呂敷を畳む完結編！ これを読まずにリバーシブルは終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ！)

## 異説太平洋戦争・美少女艦隊波高し！【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00FMWSBFW>

異世界に転生した主人公は少女の姿になり、帝国女子海軍長官の美少女山本に拾われ、山口と名を変えてイギリスで近代化改装を終えた戦艦比叡受領に向かう。だが、比叡の前には戦艦ビスマルクが立ちふさがる。山口は、大英帝国海軍すら手に余すビスマルクを倒せるのか！ そして、日本に帰国した山口を待っていたのは、帝国の女子海軍人気に対抗して機動部隊の指揮官に就任した巨乳の美少女乳牛ハルゼーだった。帝国海軍の主力戦艦群を壊滅させた乳牛ハルゼーに、山本、山口以下の女子海軍はどう立ち向かうのか！

艦これブームは遅すぎる。美少女+軍艦ものの元祖、1998年に書かれた伝説の小説のリバイバル再刊！

## 全ての物語に終止符を打つ最終英雄ドリアン・イルザン【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00EN7GIPC>

石屋の武器店の息子、ドリアン・イルザンは、世界の外から来たという宇宙船を偶然見つける。宇宙に乗り出したドリアンは、太古の世界が作り出した神にも等しい力を持つ2つの人形、アリシアと悦人形の対立に巻き込まれていく。アリシアはドリアンに不思議な力を持つレンズを受け、全ての物語に終止符を打てと言われるが、見たことも聞いたこともない物語の数々を前にドリアンは途方に暮れる。アリシアと悦人形による神々の最

終戦争をアリシアの最終英雄ドリアンはどう決着させるのか。そして、悦人形の最終英雄、ウォー・ゼロはドリアンの敵なのか。伝説の宇宙船スカイラクはドリアンをどこに連れて行くのか。超銀河団の泡構造の向こう側に進出した超大陸級戦艦ユーラメリカは大空洞の果てに何を見つけるのか。

これは最後に読む物語ではない。

全ての始まりの物語なのだ。

読むならここから始めよ!

### ラト姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCNHE>

太古の失われた文明の時代、みなしご少女ラト・ワーゲルは小国ラルナの姫君であるミラ姫に見初められて、妹として宮廷に入る。だが、レズビアンの人として困われると思ったラトは予想に反する過酷な王宮の現実を知る。虚実の陰謀が飛び交う王宮で、ラトはミラ姫の知恵袋として破格の活躍を示す。しかし、宇宙機動遊撃軍キダシへの参加要請が届いたことで、予想もしない方向に事態は進んでいく。ラトは、宇宙艦隊の指揮官として人類を滅ぼそうとする宇宙生物ハドと立ち向かうことになる。

そして侍女志望のマイアが適性試験で見せられた異星生物の触手に身体を犯されるラト姫の姿は真実なのか!

そして、敵に掴まり、淫らな宣撫映像に自ら望んで出演するラト姫の真意とはいったい!?

### セラ姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCWD4>

普通的女子高校生の星良は、ラト姫の娘、セラ姫として謎の少年から声を掛けられる。しかし、星良は宇宙から来たラト姫などと言う嘘くさいトンデモとは縁が無かった。ところが、詳細を確認しようと図書室で調べ始めると、ラト姫関連の資料が何も残っていなかった。マスコミであれだけ

騒がれたはずの情報が何も残っていないのはおかしい。星良の真実への探求が始まる。

そして、星良の破滅願望を満たす転校生の出現。星良を校内娼婦に仕立て、破滅へと導く少年。少年はハドの探査プローブと名乗るが、ハドとは人類を滅ぼそうとする宇宙生物の名前ではなかったのか。そして、喜んでその破滅に身を委ねる星良。はたして、破滅願望を持つ星良の破綻した性格はどこから来たのか。父か、母か、それとも……。

ラト姫物語で広げた風呂敷を畳む完結編！ これを読まずにラト姫物語は終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ！)

## 魔女アーデラの事件簿【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DIQUFFS>

剣と魔法のファンタジー世界で起こる奇怪な事件。王宮から盗まれた等身大美女フィギュアを奪還すべく、王宮シーフのマールは調査を開始する。しかし、彼に付けられた相棒は、どんな男でも関係無く喜んで抱かれる淫らな美少女魔女アーデラ。はたして、二人は事件の真相を暴き、犯人を捕まえられるのか？ だが、アーデラには見た目通りではない重大な秘密があった。そして、マール自身にも隠された重大な秘密があったのだ。はたしてアーデラは GM なのか。けして自ら語らないマールとアーサー王の秘密とは何か。互いの秘密を知った時、二人は最強のタッグになる。

モンスター討伐がほとんど出てこないファンタジー推理小説！

君は腕力では無く知力を試される！

## ファンタジー勇者伝説

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00CWZTU5W>

君は知っているか！ 勇者の伝説を！ このファンタジー世界で辺境の魔王から姫を救った勇者の伝説を！

だが、王宮侍女のジーナは、その勇者の子孫ファッツ・ブレイブと知り合うことで、真実を知ってしまう。次々と明かされる驚愕の真相。辺境の魔王など存在してはいなかったのだ。そして、伝説の勇者とは、魔王と倒したのではなく、幼なじみの侍女を追いかけて隣国に旅した者に過ぎなかった。

勇者の伝説そのものが単なる虚構、つまりファンタジーに過ぎなかったのだ!

ジーナは叫ぶ。

一代で成り上がった新興商人の娘をなめるな!

彼女は、根性で古き因習に立ち向かい、隣国に連れ去られたプリマ姫を奪還できるのか!

イーネマス! 【全編(完結)PDF版】

[http://www.dlsite.com/maniawork/=product\\_id/RJ039225.html](http://www.dlsite.com/maniawork/=product_id/RJ039225.html)

イーネマス! 【立ち読み版(全16章のうち第5章まで。無料)PDF版】

<http://ura.autumn.org/Content.mod?id=2008042800000>

若くして死んだ有望な者達を、未来の火星の地底世界に転生させる来人制度で、同人誌即売会専用バスで死んだオタク達が転生させられた。自ら望んだ新しい身体をもらえるとあって、ある者は格闘ゲームのキャラの身体をもらい、ある者は美少女戦士の身体をもらった。しかし、浅岳はあくまで自分のありのままの身体で若返りだけを望んだ。そして人気同人漫画家の沢渡勇太は自分でデザインした究極の美少女に身体を得ることを選んだ。二人は、火星の地底世界イーネマスに出て行くが、あっさりと人身売買される対象になり、バラバラに売られていく。

そして、浅岳が出会ったのは孤独な幼い姫君だった。

そして、沢渡が出会ったのは、奥行きを把握させない謎の犯罪組織の幹部だった。

二人は、それぞれの立場で、イーネマスを壊してしまおうと画策する破壊趣味者と戦うことを決意する。

同時進行で、幼い姫君とのストイックなラブストーリーと、あらゆる快楽に浸る淫らな TS 美少女ストーリーが同時に進行する。

はたして、浅岳は自力で奴隷の身分を脱することができるのか!?

はたして、沢渡は性奴隷からお屋敷のメイドを経て大商人の奥様に成り上がれるのか!?

二人が再会する日ははたして来るのか!?

オタクの夢、最強の格闘キャラの身体を手に入れた男は火星の地底世界で成り上がることができるのか!

TS 成分、女装成分もあるよ。

宣伝終わり